



TITLE:

<第3章>平成15年度「工学倫理」科目(21世紀の課題と倫理)

AUTHOR(S):

山本, 悟

CITATION:

山本, 悟. <第3章>平成15年度「工学倫理」科目(21世紀の課題と倫理).
京都大学高等教育叢書 2004, 20: 55-62

ISSUE DATE:

2004-03-22

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/54009>

RIGHT:

3.2.2 21世紀の課題と倫理（物理工学科 山本 悟）

21 世紀の課題と倫理

倫理学の諸説（19世紀までの諸説）

1) 直覚説

われわれの行為を律すべき道德の法則は直覚的に明らかであって、他に理由があるわけではない。いかなる行為が善であり、いかなる行為が悪であるかは直覚的に知ることができる。行為の善悪は行為そのものの性質であって、説明すべきものではないというのである。いわゆる良心なるものがあって、直ちに行為の善悪を判ずることができるというのである。直接自明なる行為の法則があるというのが直覚説の生命である。

しかし、果たして、直覚論者の言うような、直接自明でしたがって正確で矛盾のない道德法なるものがあるであろうか。まず、個々の場合についてみると、決してこのような明確な判断のないことは明らかである。我々は個々の場合において善悪の判断に迷うこともあり、今は是と考えることも後には非と考えることもあり、また同一の場合でも、人によって善悪の判断を異にすることもある。純粹に直覚といえ、理性によって説明することはできない。また、苦楽の感情、好悪の欲求に関係のない、全く直接にして無意義の意識といわねばならない。もし、このような直覚に従うのが善であるとすれば、善とはわれわれにとって無意識のものであって、我々が善に従うのは単に盲従である。このような倫理学説は、何故に我々は善に従わねばならないかを説明することはできない。道德の本はまったく偶然にして無意味なものとなる。

2) 他律的倫理学説

道德は我々に対して絶大なる威厳または勢力を有するものの命令によっておこってくるので、我々が道德法則に従うとは、単にこの絶大なる権力の命令に従うのである。倫理学史上に現れた権力説のなかでは、君主を本にした君権的権力説（英国のホブズ）と、神を本とした神権的権力説（中世のキリスト教倫理）がある。君主（神）はまったく自由であり、善なるが故に命ずるのではなく、命ずるがゆえに善なのである。もし、君主（神）が我々に殺戮を命じたならば、殺戮も善となるのである。権力説によると道德はまったく盲目的服従でなければならず、恐怖も尊敬もまったくなんらの意義のない盲目的な感情でなければならぬ。權威説はこのように人間の道德的動機を説明することができないばかりでなく、いわゆる道德法というものもほとんど無意義となり、善悪の区別もまったく標準がなくなってしまう。道德は人性自然の上に根拠をもったもので、何故に善を成さねばならないかということは人性の内より説明されねばならない。

3) 自律的倫理学説

我々は道德の本を人性の中に求めねばならない。善はいかなるものであるか、何故に善を

なさねばならぬのかを人性より説明せねばならない。このような自律的倫理学には 3 種あって、1 つは理性を本とするもので合理説といい、1 つは苦楽の感情を本とするもので快樂説という、また今一つは意思の活動を本とするもので、活動説という。

合理説は道德上の善悪正邪を知識上の真偽と同一視している。ものの真相がすなわち善である。ものの真相を知ればおのずからなにをなさねばならぬかが明らかとなる。何故に善を成さねばならないかといえ、真理なるが故であるというのである。しかし、真理ではあっても正義であるとは限らず、この説はまったく「ある」ということと「あらねばならぬ」ということを混同している。「ある」からは決して「あらねばならぬ」は導き得ないのである。

快樂説には 2 種類あって 1 つを利己的快樂説といい他を公衆的快樂説という。利己的快樂説は自己の快樂を人生唯一の目的となす。この説の代表者はエピクロスやアリスチッポスである。公衆的快樂説の代表者はベンサムで、最大多数の最大幸福の主張で知られる。人間もし快樂が唯一の目的であるならば、人生ほど矛盾に富んだものはなかろう。むしろすべて人間の欲求を断ち去った方が反って快樂を求める途となるからである。エピクロスがすべての欲を脱した状態、すなわち、心の平静を以て最上の快樂となし、かえって正反対の原理より出立したストイックの理想と一致したのもこの故である。快樂説は合理説に比べれば一層人性の自然に近づいているが、この説によれば善悪の判断は単に苦楽の感情により定められることになり、正確なる客観的な標準を与えることはできず、かつ道德的善の命令的要素を説明することはできない。

活動説は善が何であるかの説明を意思そのものの性質に求めるものである。意思は意識の根本的統一作用であって、直ちにまた実在の根本たる統一力の発現である。意思の価値は意思そのものの中に求めるほかはない。意思活動の性質は意識の上には目的観念として現れ、そこで善とはわれわれの内面的な要求すなわち理想の実現、換言すれば意思の発展完成であるということになる。このような根本的理想にもとづく倫理学説を活動説という。この立場では、善とは一言で言えば人格の実現である。真の善とは唯一あるのみで、すなわち、真の自己を知るというに尽きる。

2 1 世紀の課題

1) 科学技術の進歩と倫理

上述のように、19 世紀までの倫理学説は、他律的倫理から自律的倫理への発展と捉えることができ、人間の自由、主体性、人間存在の尊厳などを中心に、人性に基づく倫理諸説が展開されている。これはある意味では当然のことといえる。というのは今日のように科学技術の発達していない時代においては、人間は巨大な自然の力や神に支配され、依存する存在であったからである。したがって、自然や神に対する人間の自由、主体性、人間存在の尊厳の問題は最大の課題であった。しかし、科学技術の発達で、人間は自然に支配

されるどころか、ある意味では逆に自然を支配する存在となり、神への依存もそれだけ少なくなった。20世紀はまさに科学技術が歴史を動かす時代になったのである。科学技術の発展に裏付けられて、産業技術は機械化され、自動化され、巨大化し、大量生産、大量消費が行われるようになった。機械は人間が作り出したにもかかわらず、やがて人間の手を離れ、そこで働く人間は、自らが作り出した機械によって働かされるようになった。人間の労働は画一化、平均化され、機械の一部品として組み込まれてしまった。人間は個性を失い、その存在感を失っていった。このような状況下で新たに現れたのが、実存主義哲学である。この哲学が扱った問題は、人間の自己疎外の問題であり、現代人に見られる機械への従属化、個性の喪失と平均化、組織への埋没などがとりあげられた。さらに最近では、情報技術の発展や、医療技術、遺伝子操作の技術も加わり、前世紀には想像もつかないような新たな問題が現れてきた。

2) 20世紀から何を学ぶか? 21世紀の課題

20世紀から何を学ぶか? 20世紀で問題になった主なものをあげると、人口問題、貧困問題、資源問題、環境問題、戦争と平和の問題を挙げることができよう。またそこで生じた新たな倫理問題として、生命倫理、医療倫理、政治倫理、環境倫理があげられる。これらはそのまま21世紀の課題である。

これらから明らかなことは、人間が作り出した科学技術の進歩によって人間の存在が保証されるどころか、人間の存在のための条件が破壊されていることである。機械化、自動化が進行するとともに、労働の疎外と画一化、失業と貧困化などの問題がおこり、人間は存在感と人間性（自由、主体性）を失いつつある。ここに科学技術だけでは解決できない状況が生まれており、新たな意味で倫理が重要になっていることがわかる。しかも、その倫理は今までの倫理ではなく、新しい倫理が問題になっている。というのは上で確認した21世紀の課題は、20世紀までの倫理のように、人間の本性に基づく倫理観ではどうにもならない問題が並んでいるからである。ここで問題になっているのは人間一個人の問題、最高善（徳）、幸福の実現、人格の完成などといった問題ではない。人間と人間の間の関係の問題、民族と民族との間の関係の問題、国と国との間の関係の問題、人間と自然との間の関係の問題である。実体、存在するものの「存在の問題」ではなく、実体、存在するものの間の「関係の問題」である。以下この問題の理解を深めるために若干の考察を行おう。

21 世紀の倫理とは（まとめ）

1) 実体概念と関係概念の視点。

21 世紀に必要とされる倫理とはどのようなものか。ここでは、この問題の理解を深めるために、「実体概念か関係概念か」(E.カッシーラー) という視点の問題から考えてみる。ここで実体とか関係とかいっているのは次のような意味である。実体とはそれ自体で存在するもの、関係とはその実体の間の関係をいう。関数、 $y = f(x)$ において、実体は x や y に注目するが、関係は $f()$ を問題にする。

実体（存在）概念と関係（関数）概念は相互に相手を前提としており、どちらが先ということはない。存在を問題にするときには、「いつどこで」が問題になり時間（暦）概念や空間（地図）概念を用いるが、これらの概念は関係を問題にしており、歴史的に形成されたものである。関係を問題にする時には、存在するものの関係を問題にしているわけであるから、実体の存在を前提としている。実体概念と関係概念は相互に相手を前提としているが、物事を深く理解するにはこれらを混同することなく、明確に両側面に分けて考えることが重要である。

2) 倫理は、関係概念（社会性）の視点が重要である。

倫理は物体のように、自然的実体として存在するものではない。1920年にインドのカルカッタの森で狼といっしょに穴で暮らしていた二人の少女（アマラとカマラ）が発見された。はじめは夜になると四足で歩き回り、遠吠えをした。アマラはまもなく病死したが、カマラはやがて二本足で歩き、コップで水を飲み40～50の言葉を覚えたが17歳で死んだ。こうして、人間性は肉体的な実体的な存在だけでなく、社会的な関係が大切なことがわかる。実際、孔子の論語は人と人との関係、礼を強調しており、モーセの十戒も神と人との関係、人と人との関係に関するものとなっている。現在も、企業倫理はその社会的なありかた、関係が問題になっている。このように、倫理問題の考察には、実体概念の視点だけでなく、関係概念の視点が重要である。人間は社会的な存在であるといわれている。その問題の根本は、実体的存在と関係的存在、ここにかかわっており、人間の自己疎外の問題も結局はここに関係している。

3) 21 世紀の倫理は、実体概念から関係概念へ移行している。

上述のように、21 世紀の課題は実体としての人間存在や自然存在そのものを問題にしているのではなく、人間と人間の関係、民族と民族の関係、国と国の関係、人間と自然の関係が問題とされている。ここに、20 世紀までの倫理と 21 世紀の倫理が問題とする重点が、実体概念から関係概念へ移行しているのが見て取れる。

実体 A と B との関係

(A) A=人間、B=人間 : 道徳倫理…性差別問題、人種差別問題、戦争問題、
世代間問題 (若者と老人、現世代と将来世代)

(B) A=人間、B=環境 : 環境倫理…廃棄物問題、環境破壊問題、温暖化問題

(C) A=物体、B=物体 : 自然科学…生物、化学、物理、

したがって問題は実体 (A、B) の性質、価値 (善悪、優劣、美醜、徳、人格) で判断してはならず、それとは独立に関係そのものが追求されなくてはならない。

例 1) 差別問題の多くは、問題の所在を関係ではなく、実体に求めることから起こっている。いじめ、性差別、部落差別、人種差別は対象としての、個人、部落、人種の性質、価値を問題としている。倫理は、対象の問題ではなく、人と人との関係、部落と部落の関係、人種と人種の関係が問題なのである。

例 2) 環境倫理の問題は人間が自然に支配されるか、それとも人間が自然を支配するかの問題ではなく、人間と自然との調和の問題である。

例 3) 例えば、ニュートン力学は太陽と地球の間に働く相互作用、万有引力の上に成り立っている。これらの相互作用、万有引力は関係概念であって、実態である太陽と地球に還元することはできない。太陽と地球を単独にいくら調べてみても万有引力は見つからないし、万有引力は五感では捕まらない。ここにこそ関係概念が歴史的になかなか人間の意識の対象にならなかった理由がある。

4) 倫理は、真、善、美のうち主として、善に関するものである。

科学は真、倫理は善、芸術は美に主として関係する。

例 4) 医療倫理：心臓移植をめぐる人の死の問題。

心臓移植を実現するためには、従来のように、心臓の停止を人の死とすることはできず、脳死を人の死としなければならない。心臓はまだ動いていなくてはならないのである。倫理 (善) としての人の死を、科学 (真) としての人の死に還元することはできない。倫理としての人の死の問題と科学的認識としての死の問題が混同されている。

5) 倫理の目的は、世界の調和である。

例えば、廃棄物問題は自然界に存在しない人工物質をつくり出したこと、環境汚染問題は有毒物質を人工的に作り出したこと、地球温暖化問題は自然には起こらない異常な化石資源の消費を行うこと、戦争の問題、人類破滅の危機は核兵器や原子力発電など自然には起こらない反応を起こさせたこと、などが作り出した。また、生体間移植、人工授精、DNA 操作も自然には起こらないことを人工的に行うことから事態が深刻になった。これらの問題で共通していることは、自然には起こらないことを起こさせ、

人間の利益のために、自己中心的に行動していることであり、他との関係を無視していることである。そこで浮かび上がるのは、人間同士の関係、組織と組織の関係、人間と自然界との間の関係の問題であり、その調和の実現が問題になっている。それらの調和は実体中心的な迫及では実現不可能であり、あくまでも関係そのものの調和的なあり方が意識的に追及される以外にはその解決はありえない。そのような調和が実現してはじめて、人類の存在、尊厳と基本的人権が保証され、人類の共存共栄が可能であり、地球環境の保全が可能となる。以上述べたことを一言で述べれば、倫理は実体（存在するもの：人間、動植物、自然、組織、文化）の存在の保証を目的とし、倫理はその目的を達成するための、実体間の関係についての規範である、ということができる。

6) 倫理の根拠づけと実効性

倫理は自然科学のように、その根拠づけが原因にもとづくものではなく、目的や義務によって根拠づけられるものである。

上述のように、倫理が世界の調和を目的とするのであれば、「である」ではなく、「べきである」という要素をもち、世界の調和を実現する義務と責任が生ずる。関係の調和を乱す行為をすれば、責任が生ずる。世界の調和を実現するための内容は風習、習慣、伝統、規則、法律などの形で存在する。また、倫理はそれに従われるべきである。したがってある意味での強制力が必要である。しかし、倫理は実体概念ではなく、関係概念であるから、特定の实体が強制力を持つことはありえず、対等平等な実体（構成員）の構成する上部組織を必要とする。家族構成員に対して家族、市民に対して国家、国家に対して国連のような上部組織である。このような上部組織が一定の強制力を持ち、その下に各構成員は倫理に従う。

7) 倫理の普遍性

ここでいう普遍性とは、いつでもどこでも時代、空間の制約を超えて成り立つこと、適用対象の範囲が広いことを言う。人間の社会存在が意識を規定する（マルクス）。あらゆる生きた思想は存在に拘束されている（マンハイム）。人となりはその社会のあり方によって規定される。これらの命題は、意識、思想、人となりは民族、時代によって変化し、したがって、普遍性を欠くことを意味する。さらにまた、一人の人間に還元できるものは普遍性を持ち得ないことがわかる。では、普遍性をもつとすれば、倫理はどのようなものと考えなければならないであろうか？ 結論から言えば、普遍的倫理は実体概念にもとめてはならず、関係概念に求めなくてはならない。実体に普遍性をもとめることはできなくとも、実体間の関係には普遍性を求めうるからである。自然科学の理論体系からわかるように、より普遍的な理論ほど、実体概念から関係概念へと移行している。したがって、一般的に、実体についてよりも関係についての方

がより普遍的な価値を持つといえよう。人間と人間の関係、組織と組織の関係、人間と自然の関係にも、それらがいわばシステムとして存続するためには、その安定性、調和が必要となり、そのためのあるべき関係、規範、法則は普遍性を持ちうる。

例5) 民族宗教(ユダヤ教、実体概念:選民思想)と世界宗教(キリスト教、関係概念:隣人愛)

例6) 価値ある対象を求める愛(エロス、実体概念:美しいものへの愛)と無差別で平等な愛(アガペー、関係概念:醜いものへの愛、汝の敵を愛せよ)

例7) 愛国心(ナショナリズム、自国、自民族だけを愛する)、20世紀の戦争。

8) 倫理は普遍的伝達可能性を持たねばならない。

倫理は、理性のみに関係するとは限らず、感性や感情、悟性にも関係する。従って、必ずしも論理的に証明できたり、理解できるものとは限らない。したがって、説得でき認識できるものとは限らないが、合意や同意はでき、あるいは信ずることはできるものである。倫理が倫理として機能するには、普遍的伝達可能性を持たねばならない。

9) 倫理は、現実的なもの、実践的なものである。

死後の世界、空想、ユートピア、理念、理想、抽象に過ぎないものではない。また真理の認識の問題ではなく、倫理は、善の問題、われわれの毎日の現実の生活での実践の問題である。

例8) 黄金律:何人にも自分がその立場にいればして欲しいと思うことをせよ(されたくないことは何人にもするな)。

10) 倫理は、民主主義の原理に調和するものである。

現実の不平等と法の下での権利の平等。投票権の平等(1票の平等)

レポート課題

- 1) 人類にとっての21世紀の課題としてあなたはどのようなものを考えるか?
- 2) 倫理はそれ(21世紀の課題)にどのように取り組むべきと考えるか?
- 3) 倫理的問題を自由に設定し、考察せよ。
- 4) 倫理に関する本についての読後感
- 5) 今日の講義について感じたことを自由に述べてください。

以上の5題の中から2~3題を選んでください。

(山本 悟 物理工学科)